# Foreword 巻頭言

## 問題意識を持つこと

**緒方 四十郎**
Shijuro Ogata
緒方四十郎
株式会社堀場製作所
取締役[*1]

*1：2006年6月17日に取締役を退任。

1995年6月以来，HORIBAの非常勤取締役を勤めているが，私は経営について素人であるばかりでなく，技術については特に門外漢である。それでも，取締役会では経営問題については愚問を発することが多いが，技術についてはただただ承る他はない。とはいえ,HORIBAの原点である計測技術についてだけでなく医用に至るまで，多くの分野で次々と新技術を発見，発明，発展させているHORIBA技術陣の業績は，私も高く評価している。全くの門外漢として，極めておこがましいが，研究陣に更に望むことがないわけではない。

一つは，常にあらゆることに知的好奇心を持ち続けることである。そして，もう当然と思われていることに対しても，いつも“はてな？”という疑問を抱き，自分の頭で考え直す習慣をつけてほしい。特に上役や先輩の業績には，敬意を表しつつも，アラ探しという意味ではなく，問題点がないかどうかを考えてみることが大切である。
次に，自分の疑問や質問や意見を回りくどくなく，できるだけ明解に表現する習慣をつけることが必要である。また，疑問，質問，意見をぶっつけられた者は，謙虚に耳を傾けなくてはならない。わが国では，古来，先生から教わったことを記憶し復唱することが美徳とされてきた。基礎的なことは，どの部門でも記憶すべきことが多々あろうが，異論を述べ合い，討論することがなければ進歩はない。

先日，エール大学の学長が訪日した際，その話を聞く機会があった。学長は，一時は米国をも凌いだ日本の技術が米国に遅れ始めてきたことを指摘し，「これを改善するためには，自由に討論する習慣を打ち立てなくてはならない。」と論じた。ハーバード大学のある教授は，「同大学に学ぶ学生のうち，日本人の場合『修士課程を終えたので博士課程に進みたいが，何をテーマにしたらよいか？』と尋ねる者が多い。」と述べ，「博士課程にまで進もうとする者が，自己の問題意識を持っていないのは嘆かわしい。」と断じた。わが国が先進国に追いつくことに専念していた時代には，他人の出題に答えていれば足りたかもしれないが，今やそんな時代ではない。

技術開発の担当者は，当然のことながら理工科系の人材が多いと思うが，自分の分野だけでなく，広く世界の情勢についても関心を持ち続けてほしい。2003年以来，日米学生会議に招かれて2度日米関係について基調講演を行ったが，その都度，よい質問をするのは日本人より米人が多く，しかも，これら米人の専攻を調べると理工科系の学生が多数を占めているのには驚かされた。
2005年5月には，慶應義塾大学の理工学部に招かれて“人間教育講座”なるプログラムの一つとして，“社会の中でどう生きるか？”という問題について話をした。私の話は主催者の期待に沿えるようなものではなかったが，理工科系の学生に広い視野を持たせようとした試みであったと思う。

私のように，数学などが不得手なため文科系に進学せざるを得なかった者からみれば，理工科系の出身者の方が遥かに優秀なはずである。専門分野の研究に沈潜することは必要であるが，その一方で，広く世界や日本の将来について思いを馳せることを忘れないでほしい。広い視野を持つことは，必ずや専門分野の研究の発展を助けることになるものと確信する。